

## 史跡難波宮跡発掘調査（NW02-8次）現地説明会資料

平成14年11月30日（土）  
 大阪市教育委員会  
 財団法人 大阪市文化財協会

### はじめに

難波宮跡公園を中心とする一帯では、1954年から始まった発掘調査によって、大きく分けて2時期の宮殿跡（前期・後期）が見つかっています。前期難波宮は建物が掘立柱で瓦を葺かず、全面に火災の跡があり、天武天皇の朱鳥元年（686）に火事があった難波宮と考えられています。後期難波宮は、聖武天皇の時代に一時（744）首都ともなった難波宮で、礎石建ちの柱で瓦を葺いた建物があったと考えられています。この前後2時期の宮殿跡がほぼ同じ場所に建てられていたことが、難波宮跡の大きな特徴といえます。

今回の調査は公園の北東隅部分で行っています。ここは前期難波宮の東八角殿院（八角殿とそれを取り囲む回廊）後期難波宮の東外郭築地が存在すると推定される場所です。1987年度の調査（NW87-54次）及び昨年（NW01-5次）によって、東八角殿院の詳細は明らかにされつつあります。今回の調査ではこれまで未調査であった部分を明らかにし、この地域の建物の正確な位置や規模についての知見を得ることを目的としています。

### 調査成果

#### 1．前期難波宮東八角殿 西・北辺（南調査区）

八角殿は他の古代宮都には見られない難波宮における特徴的な建物で、法隆寺夢殿のような平面形が八角形の大規模な掘立柱建物です。今回の調査では、87年度の調査で検出した柱穴も含めて22基の柱穴を見つけました。柱穴の掘取り穴には火災のあとを示す焼土が見られます。柱穴は大きいもので掘形が約1.3×1.1m、柱の直径は約0.4mです。八角形一辺の長さは少々ばらつきがありますが、もっとも外側部分で約7m（3.5m×2間、1間＝約12尺、1尺＝0.292m）その一つ内側では約6.3m（3.15m×2間、1間＝約11尺か）となっています。対辺間の距離は、2カ所でしか測れていませんが、外側の柱の間で約17.3m（約59尺か）ほどです。また他の建物の掘形がほぼ東西南北に沿う形で掘られるのに対し、八角殿の柱掘形は、建物の中心から放射状に掘られています。今回の調査によって、東八角殿の全体像が明らかとなりました。

#### 2．前期難波宮東八角殿院回廊 北東隅部（北調査区）

八角殿院回廊は、八角殿のまわりを取り囲む複廊形式の掘立柱建物です。これまで、南辺・西辺・東辺の一部が明らかにされ、正確な規模がわかりつつあります。今回は北東隅部分を明らかにしました。柱穴は去年の調査で検出したものも含めて7基見つかり、柱穴の大きさは一辺約1.1m、柱の直径は約0.3mです。隅の部分であるため、柱間はすべて約2.4m（8尺、なお通常は桁行10尺・梁行8尺）となっています。また前年度の調査で回廊の北西隅部分が見つかり、回廊の正確な東西距離が判明しました。回廊外側で約41m（140.5尺）、中心間では約36.5m（125尺）ほどです。回廊外側の柱穴では小柱穴が付随するものが見つかりました。小柱穴は前期難波宮の主要な建物に見られるもので、本柱を建てた後に掘られており、柱穴に

は焼土が混じります。全体に、今回の調査では焼土の跡があまり明確ではありませんでしたが、それ以外はこれまで見つかった回廊柱穴と同じような特徴を備えていました。

#### 3．後期難波宮東外郭築地（北調査区）

後期難波宮の外郭築地は、内裏・朝堂院部分を外部と区画するためのもので、瓦葺きの築地塀と考えられています。今回の調査では、東外郭築地推定ライン上で築地跡を示すと思われる瓦の分布と浅い掘込みを検出しました。北調査区の東側は地盤が土壇状に高くなっており、瓦はその土壇状高まりの上で見つかりました。瓦の分布をよく見ると、東・西にそれぞれかたまって存在していることが見て取れます。特に西側の瓦は調査区の南北を通じて見つかり、この分布範囲から瓦のない中央部分が築地跡で、両側の瓦が分布する部分が築地の外側に当たる可能性が考えられました。瓦のない部分の東西幅は約2.4～5m（8尺）です。

次に確認のために北壁裾にトレンチを設け、断面をよく観察した結果、築地の地業を示すと思われる厚み約10cmの浅い掘込みが見つかりました。掘込みは東西幅が約1.8m（6尺）で、東・西瓦溜まりの間におさまり、掘込みの埋土には礫が多く混じります。以上の結果が築地の存在を表しているとする、その基底幅は掘込みの東西幅約1.8mに近いものと思われ、

また、今回この築地塀に先行する遺構として大規模な掘立柱建物跡を検出しました。建物跡は上で述べた浅い掘込みと瓦溜まりの下で見つかりました。浅い掘込み・瓦溜まりの下には幾層かの積み土があり、地山の上を整地したものと思われ、柱穴はその積み土の上から掘られています。桁行5間以上、梁行2間以上の南北棟の総柱建物と思われ、地山上の積み土・柱穴から瓦の破片が出土していることから、後期難波宮に関係する建物と思われ、検出した柱穴は13基で、桁行柱間約3m（10尺）、梁行柱間約2.1m（7尺）であり、建物の型式からすると複廊跡、あるいは門跡とも考えられます。複廊跡であるとするならば、築地塀が造られる前の段階にもこの場所に外部との区画を行う施設があり、それが築地塀に造り替えられたと考えられます。また、後期難波宮における建替えという点では、同じように東外郭築地に先行する建物跡がNW19・121次調査で見つかり、今回の発見は後期難波宮の具体的な造営史を知るうえで貴重といえます。

最後に、今回見つかった北調査区東側での遺構の変遷を整理すると、以下のようになります。

- 1．まず地山上を整地（積み土）する（整地土には瓦が含まれる）
- 2．その整地土の上から掘立柱建物が造られる
- 3．掘立柱建物が廃棄された後、築地塀が造られる（建替えの可能性）
- 4．築地塀が廃棄される（築地塀の両側に瓦が散乱）

### 用語解説

- 複廊：主として回廊において中央に間仕切り壁があり、それを挟んで両側が廊下になっているもの。薬師寺、平城宮の回廊などがこの例
- 築地：粘土を築き上げて造った塀。柱を立て板を添え、その中に泥粘土を打ち込む。飛鳥時代に仏教建築と共に導入された。屋根は瓦葺き又は板葺きとする。「築垣（ついがき）」、「築地塀」ともいう。

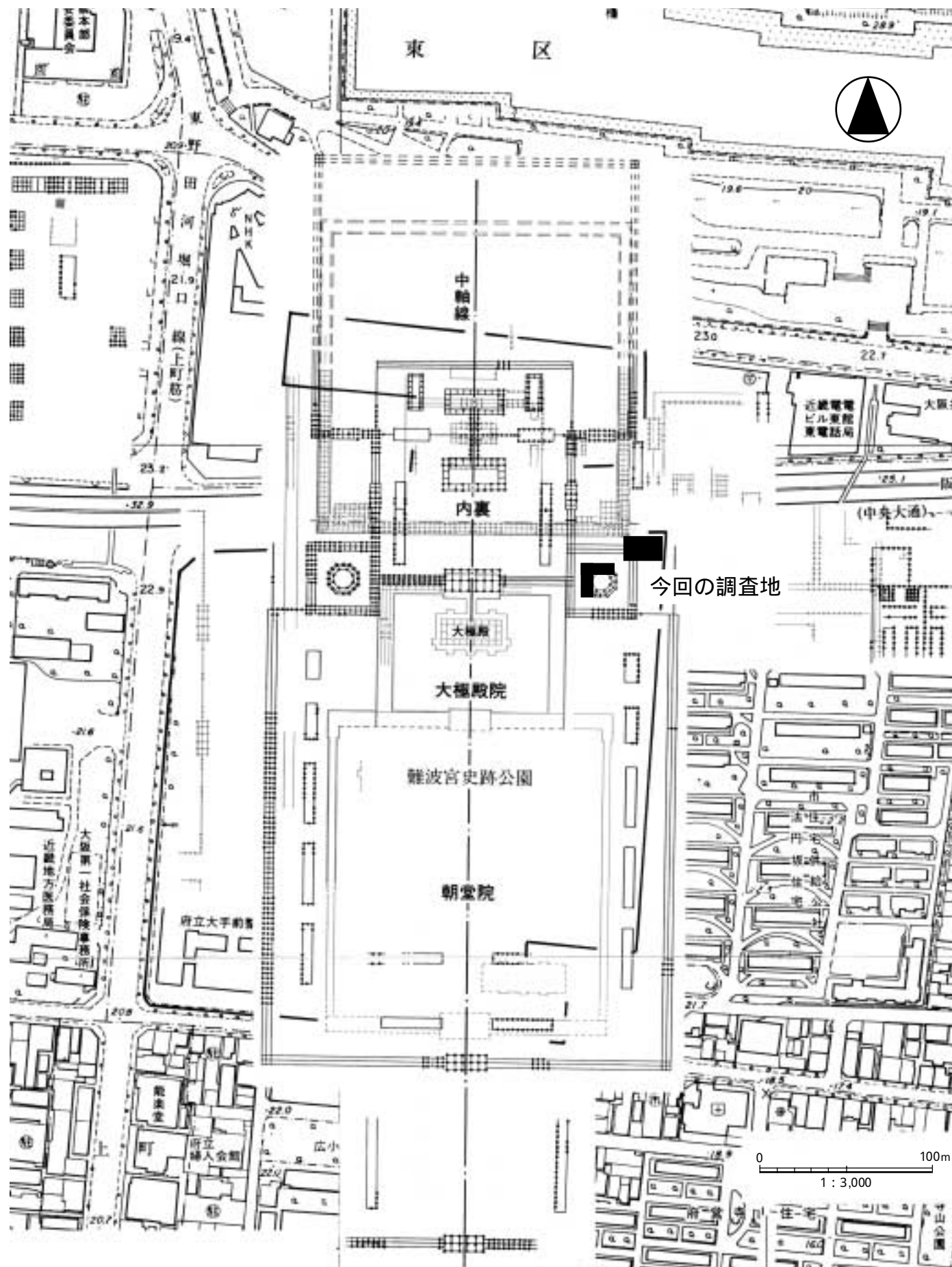


図1 調査地位置図

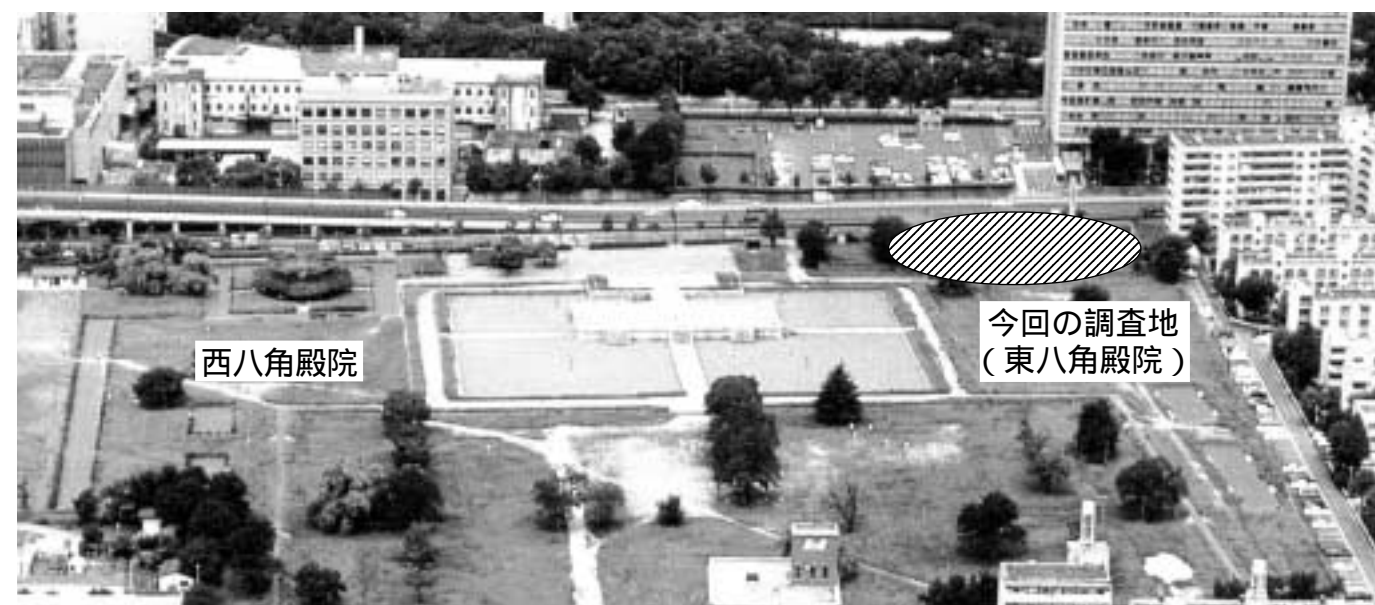


図2 上から見た今回の調査地

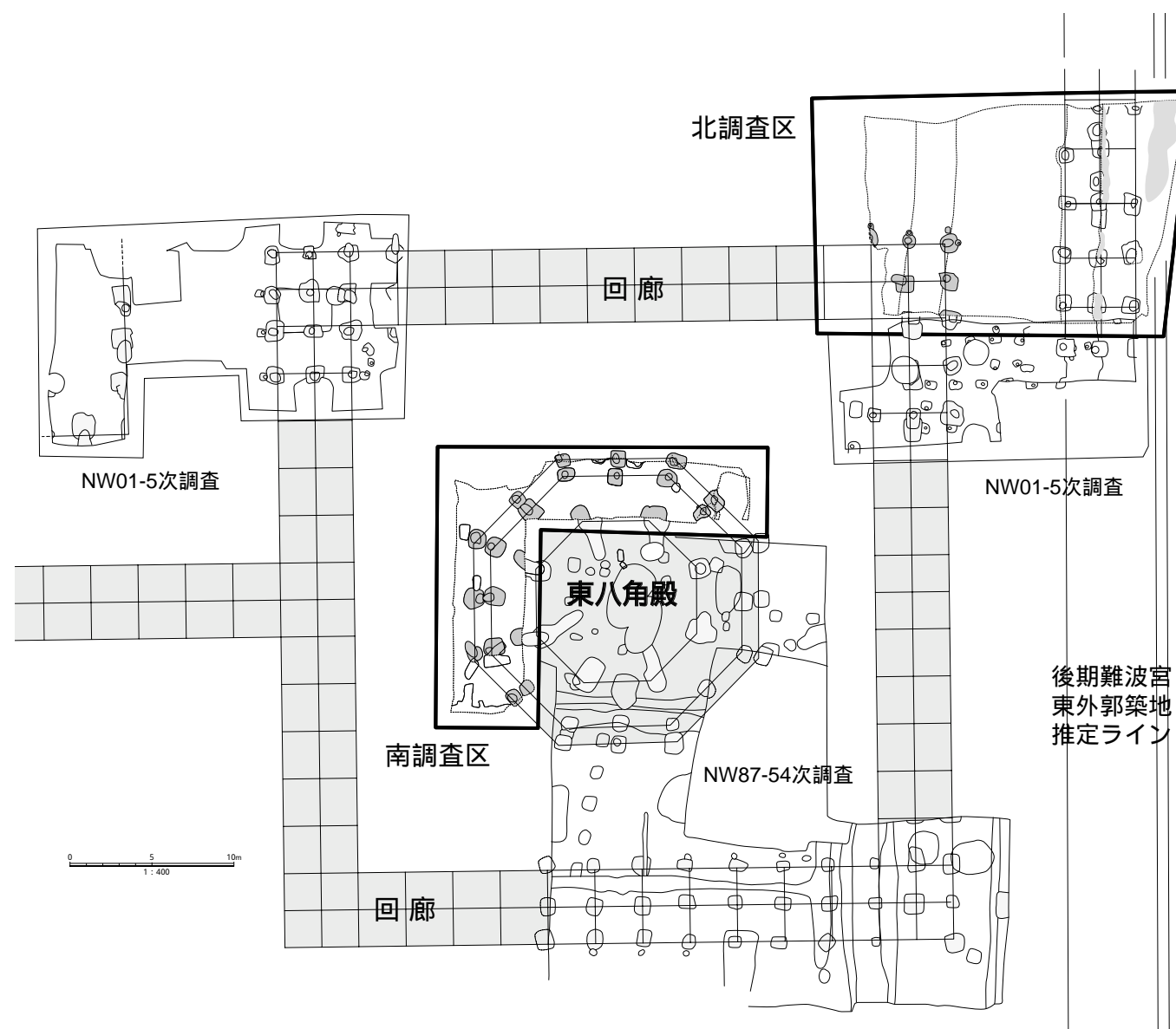
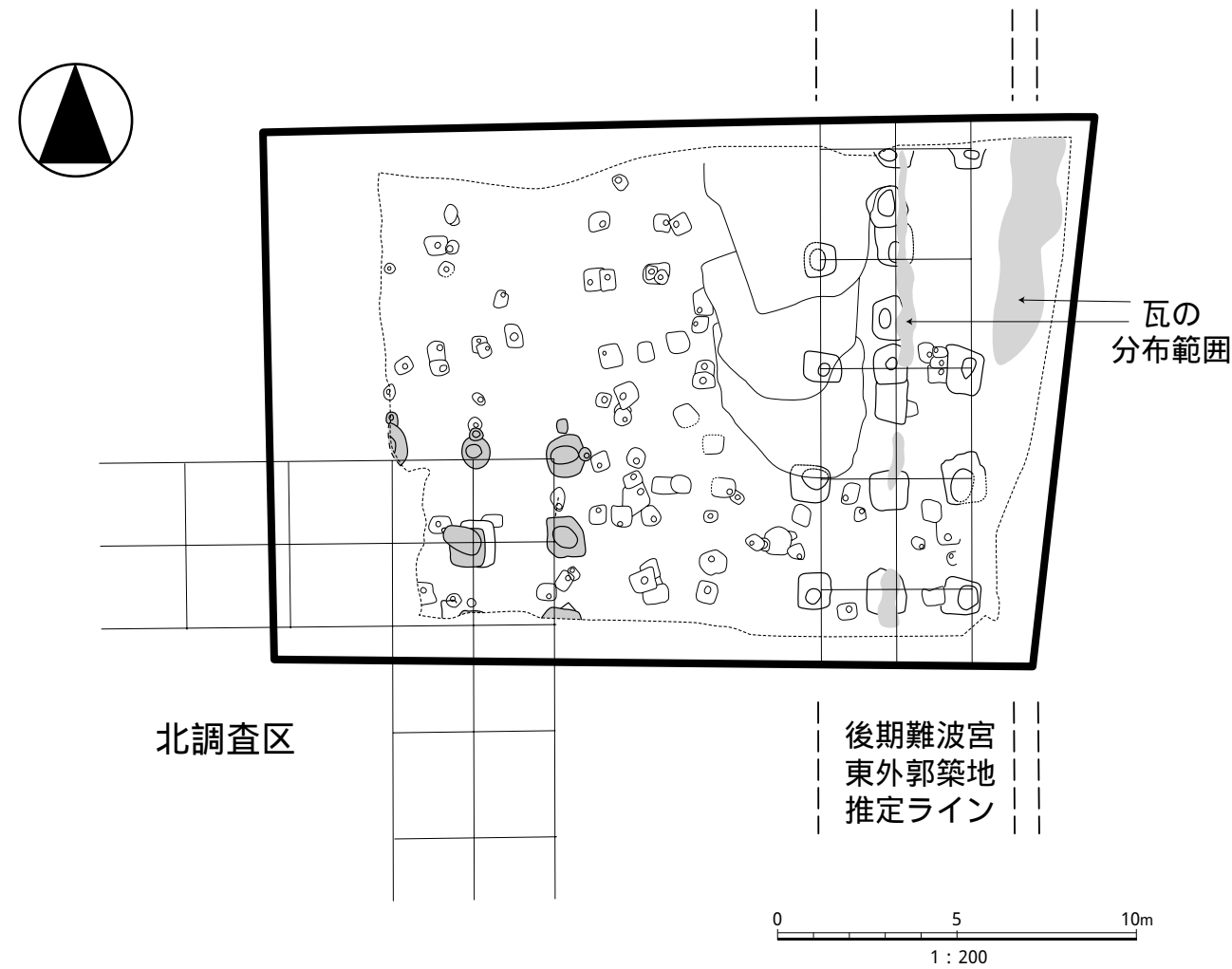


図3 これまでの調査地と今回の遺構配置図

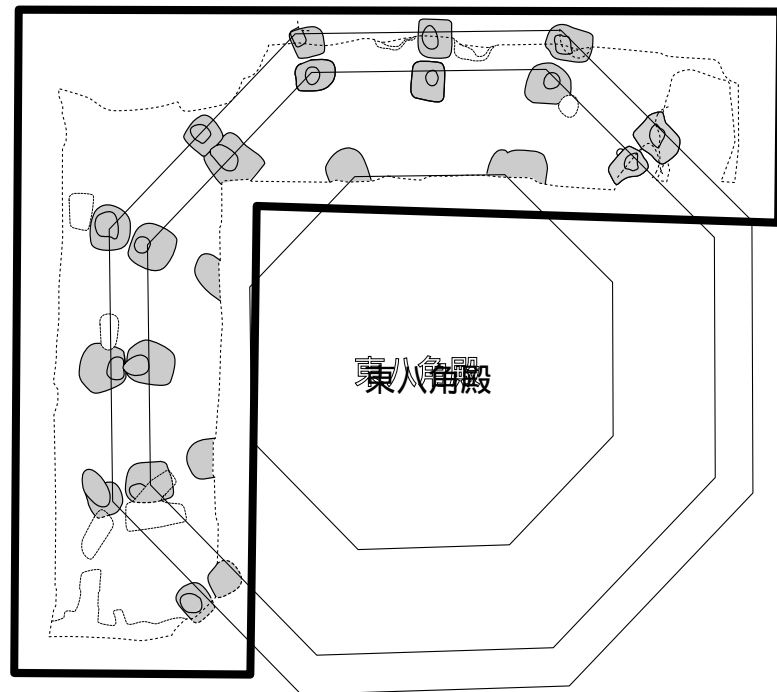


北調査区

後期難波宮  
東外郭築地  
推定ライン

南調査区

図4 各調査区の遺構配置図



東八角殿

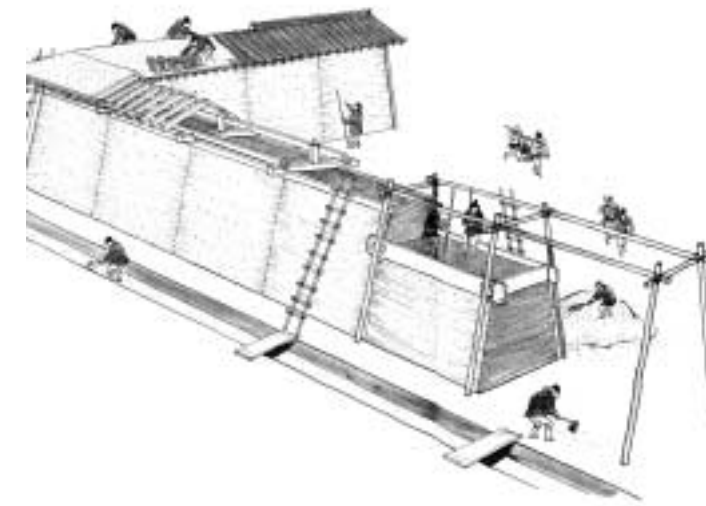


図5 築地塀のつくられかた  
(宮本長二郎著、『平城宮』、草思社1986より)

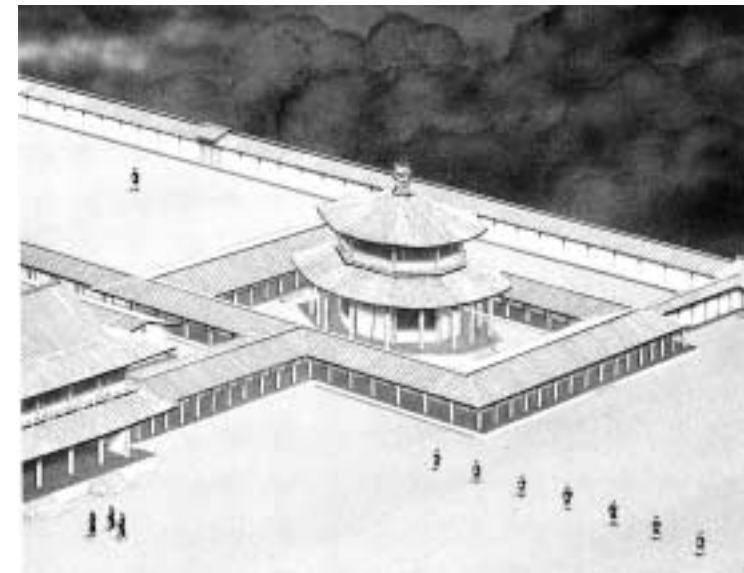


図6 前期難波宮東八角殿院復元想像図

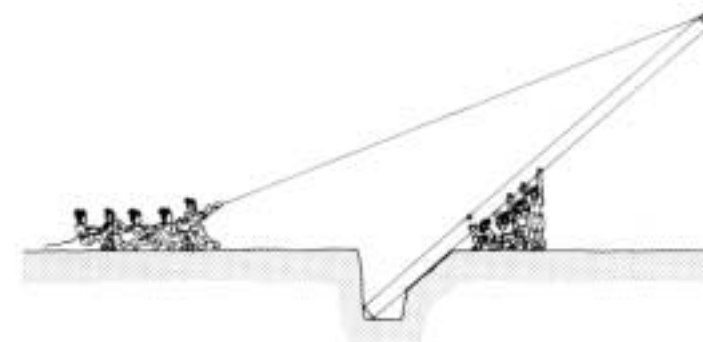


図7 八角殿掘立柱の建てかた模式図

難波宮関係略年表

天皇	年	元号	遺構	事象		
応神	5世紀	(遺構)		難波に行幸 (大隅宮)		
				難波に都す (高津宮)		
仁徳	欽明			難波に行幸 (祝津宮)		
				(このころ仏教伝来)		
推古	608	推古16	遺跡跡建宮物下跡層	外国使節を難波に饗する (四天王寺・法隆寺建立)		
				遣隋使難波より出発		
孝徳	645	大化元		(大化改新)都を難波に移す		
				難波長柄豊碕宮完成		
天智	667	天智6		(大津宮遷都)		
				(壬申の乱)		
弘文	672	弘文元		(飛鳥浄御原宮遷都)		
				折津城の初見		
天武	673	天武元		難波に羅城を築く		
				678	6	難波に都せんと詔す
				679	7	大蔵省より出火、宮室全焼
				684	12	
持統	694	持統8		(藤原京遷都)		
				難波宮に行幸		
文武	699	文武3		難波に行幸		
				706	慶雲3	(平城京遷都)
元明	710	和銅3		難波宮に幸す		
				元正	717	養老元
聖武	726	神龜3		藤原宇合を知造難波宮事とす		
				732	天平4	宇合らに物を賜う(工事一段落か)
孝謙	756	天平 神寶8		難波京の宅地を班給す		
				734	6	難波宮を皇都と定む
				744	16	(平城京遷都)
				745	17	
光仁	771	宝龜2		天皇、難波宮の東南新宮に御す		
				難波宮に行幸		
桓武	784	延暦3		(長岡京遷都)		
				793	12	この頃難波宮廃止か
	794	13		(平安京遷都)		

図7 八角殿掘立柱の建てかた模式図

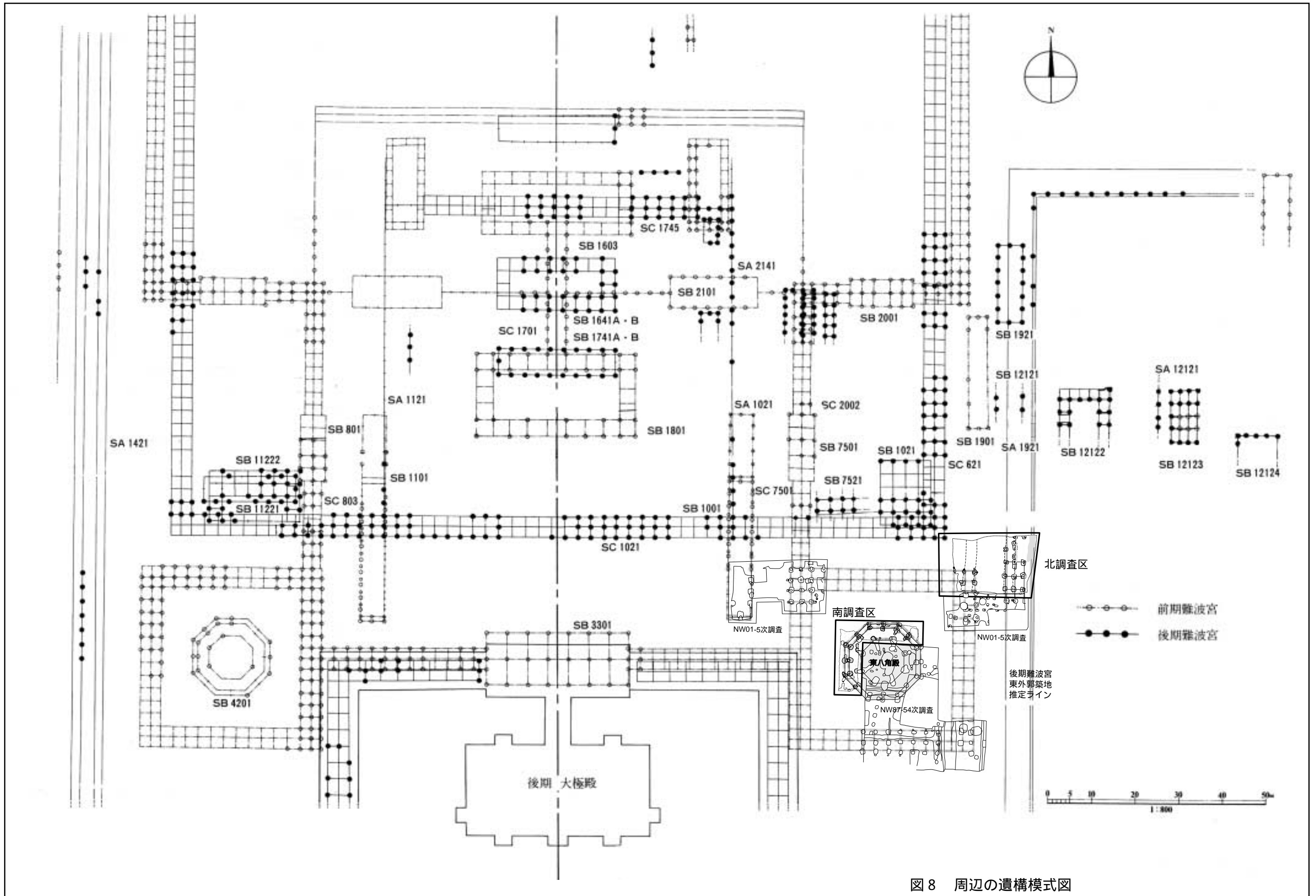


図8 周辺の遺構模式図